

中日ニュース

第二二四号 内容

一、半年ぶりに宗谷帰る

苦闘のあとを残して、南極観測船宗谷が四月二十八日東京港に帰つて来ました。日の出棧橋を埋めた家族や、出迎えの人々に迎えられて、村山副隊長をはじめ隊員や救い出されたカラフト犬たちも至極元気でした。
苦勞をねぎらう船港式も行われましたが、もう一度来年もというのが、隊員たちの切なる願いであるようです。

カメラ・ルポ

一、この子らにしあわせを

—子どもの日に

大阪ミナミの盛り場の近くに三千世帯のバラ屋ニコヨンが住む日本最大のスラム街があります。

この子どもたちの中には、戸籍もない子もいて、正確な数もわからない有様ですがその三割は未就学児童といわれ、犯罪と貧乏の中でゴミのように野放しになっています。

大都会の谷間に教育の空白地帯が手つかずのまま放り出されているのです。

また、東京都下多摩の緑成会にはからだの障害が重すぎる理由で、どこの施設にも入れなかつた子どもたちが、からだの不自由と闘っています。

面会に来た父親、入園の希望を叶えられた子どもを連れて来た父母は、わが子のしあわせを願い涙ぐましい努力をつづけています。

こうした障害の中でも進行性筋萎縮症とよばれる病氣は、四、五才頃に発病し、やがて十五、六才頃には例外なく死んでゆく悲惨な病氣です。

治らない理由で満足な治療も受けられないこの少年たちは死の床で救いの手を待つて

一、火ぶたを切つた選挙戦

四月二十五日の衆議院本会議。社会党の不信任案を受けて立つた政府は予定通り解散を行うことになり、解散証書が益谷議長によって朗読されます。

こうして話合解散のルールを作つた岸さんは、足どりも軽く自民党の議員総会へ——重荷を降してさすがにホットした面持ちです。

一方、全員当選を意気込む社会党では、解散の主導権を握つただけに、マイクに答える鈴木さんも満々たる自信にみまぎつていようです。この夜三木、松村氏を中心とする自民党の反主流派はある料亭に会合、勢力拡大をめざして対策を講ずれば、保守党きつての大部屋河野一家でも、新旧候補者が勢揃いするなど党内各派の微妙な対立は、社会党との対決など眼中にないようです。

それでも公認候補に必勝を托す岸さんは、卒業式よろしく総裁室へ一人一人呼んで公認料など百万円を渡しました。

一方、東京法務局には供托手続をする人々がぞくぞくと押かけ、金十万円也の供托金が納められています。こうして三年三カ月振りに国民の審判を受ける総選挙を前に四月二十八日、両党首の立合演説会がひらかれ早くも、激しい応酬が展開されました。

製作配給 東京中日新聞、中部日本ニュース映画社